

### 【短報】シマゲンゴロウとコシマゲンゴロウの越冬場所を示唆する観察例

我が国には7種のシマゲンゴロウ族 *Hydatichini* (*Prodaticus*, *Hydaticus*) が生息しており(森・北山, 2002; Wewalka, 2016), 絶滅種のスジゲンゴロウ *Prodaticus satoi* を含めた4種は環境省レッドリスト2017に選定されている。シマゲンゴロウ *P. bowringii* は同レッドリストにおいて準絶滅危惧種に選定されており, 近年各地で減少傾向にある。また, コシマゲンゴロウ *P. grammicus* は全国的に普通種であると認識されてきたが, 福岡県においては近年の採集例が少なくなっており(井上・中島, 2009; 中島, 2013), 全国的にも減少傾向にある可能性が指摘されている(市川, 2016)。シマゲンゴロウとコシマゲンゴロウの2種は冬季に水域から姿を消すため, 水域から離れた場所で越冬を行なうと考えられている(森・北山, 2002)。これまで, 本族のいくつかの種については越冬場所に関する報告がされているが, コシマゲンゴロウの越冬場所については2例のみであり(山崎, 1993; 相蘇ら, 2015), シマゲンゴロウについてはこれまで報告がなかった。

筆者はシマゲンゴロウとコシマゲンゴロウの越冬個体を発見したため, ここに報告する。越冬個体は2017年4月に栃木県茂木町と茨城県石岡市の2箇所で見つかった。両県において越冬個体を発見した場所は, 水田に入水する沢水を温めるため水田上部に掘られた池である(図1)。水深が非常に浅くなった池において, 繁茂した抽水植物の抜根作業を行っていたところ, 以下の越冬個体を発見した。

シマゲンゴロウ *Prodaticus bowringii*

3exs., 栃木県茂木町, 6. IV. 2017 (図2); 1ex., 茨城県石岡市, 22. IV. 2017.

コシマゲンゴロウ *Prodaticus grammicus*

3exs., 茨城県石岡市, 22. IV. 2017 (図3)。

栃木県茂木町においては, 干されて水がなくなった池の中心部に生えた, マコモ *Zizania latifolia* の根際の湿った泥中からシマゲンゴロウ3個体を発見した。また茨城県石岡市においては, 池の岸際に生えたクサヨシ *Phalaris arundinacea* の根際の泥中からシマゲンゴロウ1個体, コシマゲンゴロウ3個体を発見した。クサヨシの根際は, 踏むと水が染み出てくるほどの湿り気であり, 両種は水中の泥中に潜っていた。両種とも動きは鈍いものの, 掘り起こした際には泥から這い出てきた。抜根作業を行っていた途中に偶然発見したため, 両種が潜っていた深さは不明である。ただし, それほど深く掘り



図1. 茨城県石岡市におけるシマゲンゴロウとコシマゲンゴロウの越冬場所。



図2. 栃木県茂木町におけるシマゲンゴロウの越冬個体。



図3. 茨城県石岡市におけるコシマゲンゴロウの越冬個体。

起こしていないため, 地表面近くに潜っていたと考えられる。発見時期はいずれも4月であり, 地域によっては両種の越冬明けした個体は水域に出現している可能性がある。しかし, 発見した個体の動きが鈍かったこと, 発見場所の周囲に存在する水田は入水前であり両種が確認されなかったことの2点から, 全て越冬個体であると判断した。

海外においては水域から離れた森林のリター内部や苔の下, 低木の茂みに覆われた砂中から本族複数種の越冬個体が発見されている(Galewski, 1964;

Braasch, 1989). 我が国に生息するオオイチモンジシマゲンゴロウ *Hydaticus pacificus conspersus* の越冬個体は、水深の浅い泥湿地の落葉下もしくは落葉下の泥中(松本・磯崎, 1988) や、山間の小川が涸れてできた水溜まりに堆積した湿った落葉下(今井, 1988) において発見されている。コシマゲンゴロウの越冬個体は、ガマやイネ科植物が茂る湿地付近の石の下(山崎, 1993) や、堀上脇に堆積した枯草の下(相蘇ら, 2015) において発見されており、本種は水域から陸上に移動して越冬することが示唆されている。したがって、適度な湿り気が保たれた植物体の根際や泥などの堆積物の下に潜るという越冬様式は、本族の多くの種で共通している可能性がある。

本族を含め、我が国に生息するゲンゴロウ類の越冬場所に関する知見は不十分である。今後、断片的な観察例であっても報告が行なわれ、より多くの種において越冬場所が解明されることを望む。

末筆ながら、図2の写真を提供して下さった高橋玄氏、文献の情報を教えて下さった中島淳氏、本稿の執筆に際しご助言をいただいた筑波大学生命環境系・助教の横井智之氏と筑波大学保全生態学研究室諸氏には、この場を借りて感謝申し上げます。最後に、本稿を審査していただいた吉富博之氏に厚く御礼申し上げます。

#### 引用文献

- 相蘇 巧・越川心暉・丸山大河, 2015. 茨城県におけるコシマゲンゴロウ上陸越冬個体の採集記録. 月刊むし, 531: 61.
- Braasch, D., 1989. Zur Überwinterung der Imagines der Dytiscidae (Insecta, Coleoptera). Faunistische Abhandlungen, 16: 141-146.
- Galewski, K., 1964. The hibernation of the adults of the European species of Dytiscidae (Coleoptera) out of water. Polskie Pismo Entomologiczne, 34(3): 25-40.
- 井上大輔・中島 淳, 2009. 福岡県の水生昆虫図鑑. 株式会社マツモト, 北九州.
- 市川憲平, 2016. タガメやゲンゴロウたちの危機. 昆虫と自然, 680: 5-8.
- 今井初太郎, 1988. 表紙さつえいメモ. インセクタリウム, 25: 30.
- 環境省, 2017. 別添資料5) レッドリスト (2017) 【昆虫類】. URL: <http://www.env.go.jp/press/files/jp/105449.pdf> (2017年10月15日アクセス).
- 松本英明・磯崎年光, 1988. オオイチモンジシマゲンゴロウの越冬場所について. Elytra, 16(2): 64.
- 森 正人・北山 昭, 2002. 日本のゲンゴロウ. 株式会社文一総合出版, 東京.
- 中島 淳, 2013. 過去から現在における水生甲虫相の変遷. 福岡県での事例. 昆虫と自然, 635: 16-19.
- 山崎一夫, 1993. コシマゲンゴロウを冬季に石下から採集. 月刊むし, 269: 36-37.
- Wewalka, G., 2016. Revision of the species of the *Hydaticus* (*Prodtaticus*) *pacificus* group of the Palearctic, Oriental and Australian Regions, and description of a new species of the *H. (P.) bihamatus* group (Coleoptera: Dytiscidae). Koleopterologische Rundschau, 86: 9-45.

(渡辺黎也 305-8572 つくば市天王台 1-1-1  
筑波大学保全生態学研究室)  
(e-mail: biolfc14.cb@gmail.com)

#### 【短報】岡山県におけるキボシチビコツブゲンゴロウの記録

キボシチビコツブゲンゴロウ *Neohydrocoptus bivittis* (Motschulsky) は筆者が知る限りでは、茨城県と千葉県、静岡県、愛知県、三重県、奈良県、京都府、広島県、香川県、福岡県、長崎県、宮崎県の12府県でしか記録されておらず、現存する生息地もわずかにしか残されていない状況である(秋田, 2008; 藤本・上手, 2003; 深川, 2015; 濱田ほか, 2008; 池竹, 2012; 井上・中島, 2009; 小阪, 2004; 森・北山, 2002など)。2017年版環境省レッドリストでは絶滅危惧IB類に指定されている。この度、筆者は岡山県内で本種を採集したので、岡山県初記録として報告する。

1 ex., 岡山県倉敷市種松山山系, 27-VIII-2017, 筆者採集・保管(図1)。



図1. キボシチビコツブゲンゴロウ。

ジュンサイやヒシが繁茂する良好な池のへりで、抽水している単子葉類ごと網ですくい取り採集した。同所的にコツブゲンゴロウやマメゲンゴロウなども得られたほか、ジュンサイ葉上にはガガ

ブタネクイハムシ、ジュンサイハムシも確認され、岡山県南部の平野部には良好な環境が残っていることがうかがえた。なお、6月にも同所でガガブタネクイハムシを確認している。しかし、同所でウシガエルのオタマジャクシも確認しており、外来生物による捕食圧や植生減少、水質悪化などの環境悪化も懸念される。また、種松山地域は青野(1981)によって包括的な甲虫類の調査がなされた結果が報告されているが、ゲンゴロウ科はチビゲンゴロウとコシマゲンゴロウの2種しか記録されておらず、特に小型水生昆虫に関してははかり調査の余地が残さ